

## 令和7年度 幼児教育シンポジウム

～おとながこどもにできること～アタッチメントの視点から考える～

基調講演講師 立命館大学産業社会学部教授 篠原 郁子 様

### 講演内容

- 赤ちゃんの気持ちの発達
- すべてのこどもがもっている「アタッチメント欲求」
- 「安心感の輪」で見る、こどもの心とアタッチメント関係
- 大人がこどもにできること
- 大人にも「心を思ってもらおう」経験



### ○赤ちゃんの気持ちの発達

- ・ 基本情動(幸福、驚き、悲しみ、嫌悪、怒り、恐怖)は、学習したり、教育したりするものではなく、0歳乳児から人間が共通にもっているものである。
- ・ 赤ちゃんは、生活の中のいろいろな出来事、経験、身体感覚に対して、まずは感じる心のしくみはあるが、それを扱うことは、ゆっくりとできるようになる。
- ・ 赤ちゃんは、赤ちゃんだから泣くのではなく、きっと、泣き止みたくて泣いているのだと思う。だから、大人は、赤ちゃんの気持ちを赤ちゃんと一緒に探し、味わい、整えることを手伝いたいものである。

### ○すべてのこどもがもっている「アタッチメント欲求」

- ・ アタッチメント欲求とは、こどもが嫌なことや怖いこと、不安なことを感じたときに、自分より大きく、強く、賢く、優しい大人とくっつきたい(安心したい、ほっとしたい)と思う基本的欲求であり、すべてのこどもがもっている。
- ・ アタッチメント欲求は、大人になっても一生持ち続ける。ただ、幼少期は自分で対応できることが少ないため、アタッチメント欲求が活性化されやすく、それに応答してくれる大人がより必要となる。
- ・ こどもと養育者間の情緒的な絆や継続的な絆は、最初から絆としてあるわけではなく、アタッチメント欲求に応答する大人との日々の経験を通して築かれ、今ここでも築き続けるものである。

## ○「安心感の輪」で見る、こどもの心とアタッチメント関係

- ・ 安定したアタッチメント関係は、大人がつくる「安心感の輪」(※)を、こどもがぐるぐると回る状態。
- ・ 「くっつくこと(近接)」は、「離れる」ことにつながる。いつでも、何度でもくっつけようと思えば、今ここから離れることができる。
- ・ 大人はこどもたちに、大変なことが何もない人生を用意することはできないからこそ、「何かがあっても何とかなる」という心もちを育てたい。こどもたちが必要なときに他者の助けを期待して求めることができるようになるためにも、乳幼児期に、大人からアタッチメント欲求に応えてもらえたという経験が必要である。

※「安心感の輪」について、詳しくは参考資料に掲載の講師著書をご覧ください。

## ○大人がこどもにできること

- ・ メンタライジング…大人の心を使って、こどもの心を考えること。
- ・ こどもは、こどもなりに感じていて(アタッチメントの文脈でいうと安心感を得たくて)泣いたり、泣かなかったり、泣き止まなかったりする。(行動はいろいろ)
- ・ 大人は、こどもの気持ちを早く一発で言い当てるのが目的ではなく、「自分の気持ちに目を向けてくれる大人がいるという経験」を届けたい。
- ・ だから、こどもの欲求に目を向けよう。できるときはそれに応えよう。その対応が完璧である必要はない。むしろ完璧でないことに意味がある。完璧でないがゆえに、こどもは学ぶ(表現について調整する、考える)し、大人も学ぶ。
- ・ 泣かないこどもを育てたいのではない。泣くほど嫌な気持ちでも、「自分は自分の気持ちを整えられる」という経験を届けたい。すなわち、こどもは大人に心を思ってもらうことを通して、自分の心の扱い方、表し方を学ぶ。
- ・ 大人は、目の前のこどもが自分の言葉で話せなくても、表さなくても、全てのこどもの中に、「見ていてね」「待っていてね」「慰めてね」「大好きって受け止めてね」などの気持ちがあることを覚えておきたい。
- ・ 安定したアタッチメント関係を基盤にして、こどもは「大人への信頼感」(困難な時でも大人は自分を大切にしてくれる)と「自分への信頼感」(自分には大人から大切にされる価値がある)を育む。
- ・ アタッチメントネットワーク…こどもがアタッチメント欲求を向ける対象は複数いる。
- ・ アタッチメント関係は、経験の上に形成される。(血縁は必要条件ではない。)どのような親子関係、家庭的背景をもつこどもであっても、全てのこどもが安心感を求めている。



- ・ 親とのアタッチメントパターンに関係なく、幼児教育・保育施設では、こどもがアタッチメント欲求をまっすぐに表現し、先生からそれに応答してもらうことで、安心感を得られる経験をもてるようにしたい。
- ・ 小学校進学後の先生とのアタッチメント関係は、幼児教育・保育施設の先生との関係によって予測される。母親との関係は関連しない。(先生は頼りにできる、頼りにしていいという体験に基づくイメージ)
- ・ 家庭の内外を問わず、こどものアタッチメント欲求に応えようとしてくれる大人との関係を経験できることの意味は大きい。こどもの周りの大人がみんなで「こどもと私の関係」を作っていくことが大切である。

### ○大人にも「心を思ってもらう」経験

- ・ こどもの育ちを支える毎日は、大人にとっても挑戦の連続である。(探索行動)
- ・ 「安心感の輪」は、大人も同じ。大人もこどもと同じく、大丈夫だと感じられるときに自分もつ力を発揮して探索行動ができる。
- ・ 大人が自分のアタッチメント欲求に応えてもらうこと、誰かとの間で「大丈夫」「なんとかなる」と感じられる経験は必要である。そのような経験をもつことを通して、こどものアタッチメント欲求に対しても、弱さではなく、「大丈夫」に向かう強さだと感じられるようにしたい。それがこどものアタッチメント欲求の価値を認めることにもつながる。
- ・ 大人も、「それいいね」「たくさん考えたね」「大変だったね」などと、「私」の心を思ってもらう、言葉に思ってもらう経験を得たいものである。このような支えがあって、日々何とかやっていけるのだろう。



#### <参考資料>

- ・令和7年度 新潟市教育委員会主催 幼児教育シンポジウム 基調講演資料
- ・『子どものこころは大人と育つ アタッチメント理論とメンタライジング』2024 篠原郁子 光文社新書

※イラスト:フリー素材【Loose Drawing(<https://loosedrawing.com/>)】